原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百九十三号

原告団レポート

CO患者――東口 一男さん

弱った体が氣がかり

早く、勝利で終りたい裁判

せめて初期の治療が完全であったら

めずらしい坑内での写真。昭和30年ごろか。左側上の人が東口さん。

そろつた一家。昭和55年1月。敏子ちやんを抱いた東口さん。

体の変調が

CO患者の東口一男さんは、いまも労災病院（大牟田市吉野）で療養中である。毎週土曜日にはきまって、荒尾市八幡台二丁目十五の十九にある自宅に帰り、月曜日にはまた帰院する。送り迎えするのは会社の車であるが、これは年中かわらない。それがどういうことか「帰ろうか、どうしようか」と迷っていたとかで、先月（十月）に奥さんが病院に訪ねたときには、大部屋（六人）から小部屋（二人）に移されていた、「きつか、きつか」とあまり話したがらなかったことなど、やはり体の変調ではないかという。

重症の身体

「今日病院へ出掛けて行きました。帰るときに見ると、ベッドに横たわり、目は半分ぐらいうつろに閉じ、白まなこが見え、いびきをかきながら眠っている主人。今までもひどいいびきはかいていたが……。

いびきの、そのうらには、今までにない最近の体の弱りようがひそんでいるようにかんじて、さみしく帰りました。

せめて、あと五カ月の定年退職までは……」

その ときの 奥さんのメモである。

本人に会っても、記憶が定かでないし、話しもできないからと、別の機会に本人には会うことにして自宅に伺がったのだが、どうもちぐはぐな感じはいなめない。

近ごろ血圧が高く、医師は、脳卒中のおそれもあるから精密検査をやるということだが、娘さんは「少し口がまめらないようだ」といいし、高いびきで眠ることが多くなったことといい、歩くときにも歩きはじめがヨタヨタして安定感がないことなど、気がかりなことが多いのである。

東口一男さんは、昭和二年四月十日生まれの五十四歳。大きくて頑丈そうな体つきから見て、やはり想像以上に老げ込んでいる。

罹災時の自覚症状不明。意識喪失時間二十四時間。精神症状＝高度の情意鈍麻。多幸・痴呆・記銘力・記憶・計算と高度のつくものが続く。神経症状＝失調・自律神経症状・視覚障害・巣病状などいずれも有。

これは昭和四十六年に作成されたカルテの一部。かなりの重症であったことを物語っている。

炭婦協の母

東口さんの本籍は和歌山県。両親が朝鮮の釜山で海運業を手広く営んでいた関係で、釜山の旧制中学商業科を卒業。終戦で引揚げた月、それにともなって任いも大牟田市の神田町から荒尾市の小鳩町の社宅へ。さらにのちに同じ縁ケ丘社宅の楓町へと転居する。

万田鉱では、坑内仕繰工としてスタートしたのだが、不運にも炭車事故で足に大きな傷をうけ、翌二十三年坑外へ。その翌年また坑内に入り、三川鉱への統合によって仕繰工となり、昭和二十六年以降は採炭工ひとすじに勤めている。

入社時の学歴は高小卒となっているが、学卒では炭鉱に入りにくいというので、かくしての炭鉱志願だった。これがのちの人生を分かつ岐路になるのであるが、これは到底予測できることではなかった。

こうして採炭工となった東口さんは、頑健な体を元手によく働いた。父親は病弱で、ついに小鳩町で亡くなり、母親ヨシエさんとの母子二人の生活がはじまる。ヨシエさんは気丈な人で進歩的でもあった。炭婦協結成以前に、縁ケ丘地区の婦人部結成に加わり、その連合婦人部の会計をつとめ、三池主婦会の初代会長となった五島頼子（現筑紫野市議）さんを、小鳩分会の婦人部長に押しだした人で、のちに三池主婦会の本部総務として活動した母である。

やさしい夫

昭和二十八年十月、熊本県玉名郡長洲町出身の奥さん（五月さん昭和五年五月二十八日生まれ）は一男さんと結婚した。五月さんの叔父に当る人がやはり釜山にいたことがあり、東口さんの両親と知り合いであったという縁だということだが、やはり五月さんの両親は「炭鉱」ということで、初めのころは反対だったという。

体の強かった一男さんは、仕事はまじめでほとんど満勤。趣味は映画、山登り、音楽。映画は洋画。音楽はかなりなものでアコーディオンを愛し、タンゴのレコードを相当集めていたらしい。

また家族思いで、五月さんに「出しはせんけど、婆ちゃんに洗濯特はないかといってみないか」とそっと耳うちするような、心細やかな一面もあった。ヨシエさんもあっさりした人で、そういわれると洗濯物を心よく出したということは確かである。

五月さんはその時刻、荒尾競馬場でアルバイトをしていた。「ドーン」という爆発音を聞いているし、海岸線を真ぐなところだけに吹きあげた煙も見ている。「火薬庫の爆発げな」という話も伝わったが、まさか三川鉱の坑内での爆発とは夢にも思わなかった。

初期の治療

家に帰ってみると、近所が大変な騒ぎ。小学校三年生の長男や二年生の長女が「三川鉱の爆発げなよ」という。ともかく子供たちに夕食を与え、楓町の闘争本部へかけつける。そしてわが家との往復。

白々と夜が明けるころ、ようやく連絡があり天領病院へ。毛布にくるまった夫と会うことができた。

しかしその夫が意識を回復するまでにはもう一日かかった。のちの話では、足を怪我していて、その痛さで眠らなかったのが命をとりとめた、ということもあった。

命だけは助かった。そう胸をなでおろすいとまもなかった。真っ黒い顔を洗わせると、いつまでも洗うことをやめない。なにを聞いてもまともに答えない。同じことをただ繰り返すだけ。そんな状態をみていると、不安がこみあげてきて、悲しくなるばかりだった。

天領病院から近くの平井分院へ転院、さらに三十九年に労災病院へ。当時から見れば良くなったものの、今から考えればもっと初期の治療が完全に行なわれていればと、五月さんはいう。

得意の歌は

東口さんは声が大きい。それは持前であるとしても、今は困るという。自分本位で遠慮がない。それが病気ではあるが気にいらないと大声を出すし、ラジオ、テレビのボリュームをいっぱいにあげたろうと思われる。この母ヨシエさんは、三池闘争後姉のいる北九州市へ。現在入院中ではあるが、七十六歳で健在とのこと。

応援で罹災

その三池闘争中、東口さんは当時としては少なかった二百五十CCのバイクを駆使して、バイク隊の一員として頑張った。

そして三十八年十一月九日。その日彼は二番方で入坑している。もともと甲方で一番方であったが一週間の応援ということで、その最後の日であり、これも運命の岐路というべきか。

罹災状況不明。とにかく本人に記憶がない。担送されて宮浦鉱から出坑したが、三十六昇付近にいる。近所では何事かと声をかける人もあるという。それも歌ばかり、眠れないと夜中にでもかけるそうだ。

数えあげればきりがないと五月さんはいうが、煙草の火は消さない。ガスの栓は締めない。孫娘とケンカをする。新聞は同じところばかり見ている。食事のとき勝手に醤油や塩をとり過ぎる。なでも相談せんと怒う――等々。そんな東口さんの得意は、カラオケで歌うこと。そのために外出の度毎に、重いラジカセを必ず持って帰るのだそうだ。

そんな父が

五月さんのいちばん苦しかった時代。それは二人の子供が中学から高校へと進んだときだった。やはり労働はこたえたという。

また長男の聰（あきら）さんが小学校のとき（四年生位か）工作など得意で、マッチの軸で東京タワーを見事に作って学校へ持っていったところ、友だちから「父さんに作ってもらったのだろう」といわれて〝そんな父だったら〟というのを聞いたときなどの話を今もよくおぼえている。

その聰さんも立派に成人し、大牟田高校の電気科を出たあと、市の保健所に勤め、恋愛のすえ結婚した悌子（荒尾保養院勤務の看護婦）さんとの間に、かわいい敏子ちゃんもできて、五月さんも今は孫の守りに専念。長女の優子さんも白鳩診療所に勤め、すでに嫁して一児の母親である。

晴れない心

五月さんの心は晴れない。CO家族の会の役員もし、裁判や諸集会にもほとんど参加してきたが、どうしても裁判を勝利で早く終らせなければと決意は固い。せめて定年までは……、という気持のなかは、どんなにか複雑な心境であることか――。